人間の能力の基礎は四、五歳頃までにつくられる

「幼児に漢字が覚えられるとしても、幼児に漢字を覚えさせて、どんな価値があるというのか。」「幼児には、もっと別な面に指導すべきものがあるのではないか。」……ということをよく耳にします。

こんなことを言う人は、漢字学習の意義も価値も知らないばかりでなく、そういうことについて深く、真剣に考えてみようともしなかった人だろうと思います。

前にも触れましたし、後でも詳しく述べますが、“石井方式・漢字学習”は、漢字学習のために、他のいかなる領域の学習を奪うものではありません。“他の学習を妨げるから”という理由があるのならともかく幼児が何もそこなわれずに漢字を覚えるということを、人々はなぜすなおに喜べないのでしょうか。まさか幼児におとなの特権を奪われる、というので恐れているのではないでしょうね。

現代の多くの心理学者や大脳生理学者は、「子供が、四、五歳までの間に、見たり聞いたり習ったりする事柄が、その子供の、その人間としての能力の基礎を決定する。」という事実を明らかにしています。

「子供の知能は、四、五歳以降は、多かれ少なかれ、固定してしまうけれども、それまでの間に変化させうることの可能性は、意外に大きい。」とされています。

その、子供の知能の発達を助ける最も効果的な方法は、“幼児期に知的な刺激を与えること”であって、具体的には、

① 早期に“言葉”の教育を施すこと。

② 早期に“文字”の教育を施すこと。

この二つであることが、明らかにされています。